

---

# 死神が天使にかわる時

中田あゆみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死神が天使にかわる時

### 【Nコード】

N8457C

### 【作者名】

中田あゆみ

### 【あらすじ】

目が覚めてみると、自分は既に死んでいて、さらに死神になっていると言われた。でもそんな記憶はまったくない。マネージャーである変な生き物(?)に言われるままに仕事を始めたが…。

## 一日目　　く死の始まりく

### 一日目

長い長い夢を見る。いつも私に向けられる、あの優しい微笑みは大きな衝撃とともに一瞬にして砕け散る。

そして私の体はもう動かない。

まるで冷凍庫で固められているかのように。

「1」

「かよちゃん、かよちゃんてば！」

ドラ もんをちよつと高くしたような声が何度も何度も“かよ”というどこか聞き慣れた名前を呼ぶ。

「うー…？」

「がよ、ぢゃ、ん…！」

「うわっ…！」

こんなものすごいダミ声をこんな耳元で叫ばれて、飛び起きない人なんてこの世に存在しないと思う。あたしはこの声の主の思惑通りにこの現実へ引き戻されたようだ。

「ほら、はやく起きて！今日もたっぷり仕事があるんだから」

その声の主は、声に似合わずとても可愛らしい姿をしていた。色はまつしろ、形は人魂（？）のようで、頬…と思われる部分はピンク色に染まり、まつげの長い可愛らしい大きな目と、可愛らしい小さな口がついている。そして驚いたことに空中でふよふよ浮かんでいた。

「な、な、な、なによあんだ！？」

1テンポ遅れて、あたしはこの状況に焦った。どこの国に人間語を話す人魂に起こされる人間がいる？そんなの空想や夢の中であるにしても現実にはありえない。でもこいつは夢の中のあたしを現実

世界に引き戻した張本人なのだ。

「何って…。僕はかよちゃんのパートナーじゃないか」

「僕って！？あんたオスなの！？その顔で！！？」

いやいや、そんなことに驚いている場合じゃない。

『かよはいつもずれてるよな』よくあいつに言われたっけ。

…あいつ？あいつって誰だっけ？

……………。

ほらまた全然関係ない所に思考が飛ぶ。それどころじゃない。そんなことより今はこの状況を把握しなければ。

「あのさあ、パートナーって一体何のパートナーなのよ？」

「何ゆってるの。仕事のパートナーに決まってるじゃないの」

「仕事？あたしまだ学生で仕事なんて…」

「…もしかしてかよちゃん記憶喪失になったんじゃない？学生っていうのは生前の事でしょ？今は死神の仕事に就いてるじゃないか」

「2」

・私はすでに死んでしまっていて霊体になっている。

・死神試験という、ものすごい難関試験を通過し、今やバリバリ仕事をこなすキャリアウーマン。

・死神には、仕事を伝えるマネージャー的立場のパートナーがいる。それがこの人魂で、私のパートナーはフヨという名前である。

この人魂の内容を簡単にまとめると、つまりこういう事らしい。信じたくない。信じられるはずがない。

でも信じるしかなかった。だって、あたしの体はもう物に触れる事ができなかつたから。話しかけても誰も振り向いてくれなかつたから。

普通はこんな風に思うと思う。

でもあたしは普通じゃなかった。全然ショックをうけなかった。

その現実を『はい、そうですか』と、すんなり受け入れていた。  
なんでだろう？

この時、失った記憶の奥底でほっと安心したような気持ちになったことを、この時のあたしはまったく気づいていなかった。

「記憶喪失ならしょうがないよね」

そう言っ、フヨは本棚から10cm程厚みのある、薄汚れた本を持ってきた。ここは死神としてのあたしの部屋で、起きた時もあたしはここに寝ていた。女の子らしいものは何もなく、それどころか、あるのは古い木でできた最小限必要な家具類だけだった。どれもこれも、今にも壊れてしまいそうな程古く見える。部屋全体が薄暗く、ちよつと動くと、積み重なった何十年分かの埃が部屋の中を自由自在に舞う。

この部屋は生きている人が住む普通のマンションの一室で、入るにはちよつとコツがいる。適当な場所で適当な合言葉を言わなければならない。その合言葉は、『自由を我らに！』だったが、何の活動をしているのかまったく分からない。

フヨが持ってきた本は“死神の基本&応用知識”と書かれていて、同じように埃を被っていた。この本を使っていたのはいつなんだろう？あたしってそんな昔に死んだのかしら？

「さ、それ全部覚えなおして」

「は！？この本全部！？」

「当たり前でしょ。知識がなかったら仕事なんてできないんだから。一時間くらいあればいけるよね？」

「無理だよ！あたし勉強大嫌いなんだから！本だってマンガしか読まないんだよ」

そうだ。あたしは勉強とは無縁の女だった。成績だっていつも中の下くらいで、『勉強しろ』と先生に口うるさく言われたものだ。そんなあたしが厚さ10cmの本を一時間で覚えられるはずがない。

頑張っても目次を覚えるので精一杯だろう。本当に死神試験に合格したのかと自分を疑ってしまう。

「あたし勉強より実践派なの。本読まなくても、フヨがああしろこうしろって言うてくれたらできるから、もう仕事始めようよ」

「え〜…」

「できるって。一回覚えてちゃんと仕事してたんでしょ？ やってるうちに記憶も戻ってくるかもしれないよ」

「……。ちょっと待ってて」

そう言ってフヨは消えてしまった。パッと一瞬のうちに。現実生物じゃないって分かっていても、こういうのはやっぱりドキッとさせられる。

「OKだよ。ほんじゃあいこっか」

「ぎゃあっ!」

フヨはいきなり、消えた位置とは違う、正反対の位置に現れた。ちょうどあたしの真後ろに。まだ慣れてないんだから、そういうことはほんとちゃんとわきまえてほしい。

「3」

キーンコーンカーンコーン。

どこの学校でも同じ、その馴染み深いメロディーは、あたしをとっても懐かしくせつない思いにさせた。

白い校舎は、同じ場所で長い間ずっと学生達の成長を見守り、自分自身もずいぶん老け込んでしまっている。まるで、疲れを取り除き、そして労るかのように、春の日差しはその老校舎を優しく包んでいる。その日差しは、あたしにも、同じように優しい温もりを与えてくれようとしているのに、その温かみを感じることができないというのは、何とも悲しく申し訳ない。

ざわざわ。

「今日さあ、あの現国のハゲのカツラがさー、」 がやがや。

「なあ、数？の宿題やった？ あれって提出いつだったっけ？」

ざわざわ。

ちょうど下校時刻だったようだ。何人かのグループになった学生達が、今日起こった様々な出来事を友達に報告し合いながら、正門の傍にある花壇の縁に座っている、あたしとフヨの前を楽しそうに通り過ぎて行く。

あたしからは見えているのに、彼らからは見えていない。とても不思議で奇妙で、そして新鮮だ。

あたしは近づいて、彼らの前で手を振ってみたり、彼らの体を通り抜けたりしてみた。何度もやってみて、あることに気がついた。見えていないはずなのに、不自然に辺りをキョロキョロ見渡したり、感じられるはずもないのに、あたしを通り抜けると、鳥肌が立った。寒気をつつたえる人がいる。きつとこれが靈感なんだ。でも、ほとんどの人がそんな様子もなく平然としていて、相変わらずおしゃべりをしながら、楽しそうに下校していく。

ふっと生前の記憶が頭をかすめた。あたしにもこんな時があった。毎日がとても幸せで、とても充実していたんだ。

戻りたい。

もう一度生きたい。

そう思わないこともない。だけど、何か大きなものがその思いを邪魔する。

戻れない。

戻ってはいけない。

絶対に。

そんな気持ちになる。

でも結局は、戻りたいと思ったとしても、戻れるはずがない。だって、あたしはもう死んでるんだから。

あたしが死んだ時、みんな悲しんでくれただろうか？ちゃんとお葬式に来てくれたんだろうか？親友のユキ、担任の佐藤、そして…、そして……。

『かよはいつもずれてるよな』

あれは…あの低くてダルそうな、それでいて優しいあの声は……。

「かよちゃん！あれだよ！あの男の子だよ！！」

「え？」

フヨが指指す方向には、確かに、校舎から出て来て一人でこちらに向かつて歩いてくる男の子がいた。男の子といっても、高校生なんだから、あたしと年は変わらない…はずなのだ。なのにその男の子は、まるで波乱万丈な人生をおくった年寄りのように、妙に落ち着いていた。そっだけ空気が違うのが、遠目からでも分かる。これは死神の力なのだろうか。

「あの人もう死ぬの？」

「うん、三日後だね」

あっさりとフヨが言う。

「死神がとりついてから、ちょうど三日後に死ぬんだよ」

「とりつくって？もうとりついてるの？」

「うん。あの人の体に触れて、初めてとりつくことができるんだ」  
「触れるって…！？あたしさつき思いつきり触れちゃったよ！触れるどころかもう通り抜けてたよ！！どうしよう！なんでもっと早く言ってくれなかったわけ！？あたしみんなにとりついちゃったよ！！大量虐殺だよ！！！！」

「まあ、虐殺ではないよね。確実に」

フヨさんは普通に間違いを正してくれた。

「ちよつと！そんなこと本気でどうでもいいよ！ちゃんと質問に答えてよ！！あたし人殺しになっちゃうじゃん！」

「まあそれ、死神だから当たり前だよ」

フヨ様はしっかりとおかしな点を見つけてくれる、とても親切な生き物らしい。

「あんたあたしのことからかってんの！？絞め殺すよ！？」

「いや、ボク死ぬとか以前に生きたことないし」



「クロス……！！！！」

「ぎゃあ！うそうそうそ！許してエー！」

何が嘘なのか不明だったが、あたしがものすごい形相でフヨのしつぽ（のように見える場所）を掴み、手で力いっぱい引きちぎろうとしたのが効いたらしく、泣きべそをかきながらやつと答えてくれた。

「ぐすつ……、あのね、死神だってこの世界にいるんだよ？ここで仕事するんだよ？仕事してる時にわざわざターゲット以外に触れないように避けてたらキリないし、疲れるし、ちゃんと仕事できないよ。ぐすつ……」

「じゃあ大丈夫なのね？みんな死なないのね？」

「うえっ、ひつく……、うん、死なないよ。ボクたちマネージャーは、死神界にあるターゲット表を見て仕事を選ぶんだ。ターゲットを決めたら書類を書くんだけど、その書類を書かないと、例えターゲット表に載ってても殺すことができないんだ。ひつく……、もし自分以外の死神が書類を提出してたとしても、ボクたちには殺すことができない。ボクたち自身が書かないと無理なんだよ。ちなみに、一度書類を書かれた人は、ターゲット表に二度と載らないことになっているんだ。つまり、一回書類書いちゃえば、その人間は書いた死神専属のターゲットってこと。そういうわけで、かよちゃんには今一件しか仕事とってきてないから、ターゲット以外に触れても何にも関係ないってわけ」

「え？じゃあさ、このままあの人に触れなければ、あの人はずっと生きられるんじゃない？」

「だめだめ！そんなことできないように、ちゃあんと最終確認があるんだよね。殺したっていう書類も書かなきゃいけないし、すうぐばれちゃうよ」

そしてフヨは、意図的なのか、それとも話続けて疲れたのか、ふうとひと息ついてから言った。

「それにね、あの人を殺すのは必然なんだ」

「？」

「だって運命の輪が乱れてしまうもの。あの人がここで死ぬ事は運命なんだ。初めから決められた、ね。だからターゲット表に載ってるんだよ。ここであの人を生かすことはそんなに大したことじゃない。だけど、違う人が入る予定だった大学に入学する。違う人と一緒にいるはずだった人と結婚する。本当はいるはずのなかった子供が生まれ、その子供も結婚する。そうやって誤差はどんどん大きくなっていき、輪の乱れもどんどん大きくなっていくんだ。わかる？ボクの言ってること」

そしてフヨは、聞き取れないくらい小さな小さな独り言を言った。「中には、その運命の輪を乱す、やっかいな死神もいるんだけどね……」

ちょうどその時だった。あたしは『それどういう意味？』という、フヨの独り言に対する追求をしようと、口を開いた瞬間だった。

「俺を迎えに来たのか」

低い声が響いた。

振り向くと、そこに彼が立っていた。

「俺は響<sup>ひびき</sup>。よろしく」

そう言って、今時の若者には珍しく、握手を求める手を差し出してきた。状況が掴めず、開いた口を閉じること忘れ、呆然としたあたしがやっと気がついた時、既に反射的に手を差し出した後だった。冷たくも暖かくもない彼の手は、とても印象的だった。

幽霊のあたしが、どうして人間に触れることができるのか、そんな疑問も浮かばない程に。

そして次の瞬間、開いた口が更に大きく開かれた。

この瞬間から“死”が始まった。

## 一日目　　もう一人の死神

「4」

「ちよつとかよちゃん…？」

「ハア、ハア…な、なに…？」

あたしは息も切れ切れにフヨに返した。疲れた…。

「何考えてんの？急に走り出したりして」

「いやいや、だってさー…」

だって、あたしは響という人を殺すことになってしまった。今まで人間を殺すなんて、当たり前だけど、ちゃんと考えたことなんてなかったのに、心の準備なしでいきなりこんなことになってしまったのだ。フヨに言えば、仕方のないことだとか、これが運命だとか、結局はこれが死神の仕事なんだからと説得されることだろう。そんなこと分かっている。理屈は分かるし、頭でも分かっている。だけどあたしの心は、まだそれに追いついてない。

記憶をなくす前のあたしは、どんな気持ちでこんな仕事をしていたんだろう。あたしの中にまだ残っている記憶からすると、あたしは人の死を簡単に考えるような、そんな人間じゃなかった。命の重さは万物すべて平等だと考えていて、蚊に血を吸われている時でさえ、叩くのを戸惑うような、そんな人間だった。

馬鹿なあたしが、わざわざ猛勉強してまで死神になって、感情を押し殺してまで死神を続けていたというのだろうか？

あたしは走り続けた。どんなにしんどくても、どんなに疲れても、ぜったいに足を止めなかった。

それはまるで、人を殺すという現実から逃げているかのようだった。

「自由を我らに…」

ブーブーブー

「だから、自由を我らにだってば！」

ブーブーブーブー！

やっとゴールだというのに、あたしは最後の難関にひっかかってしまっていた。

「ちよつと、どーゆーことよ？部屋に入れないんですけど！」

自分に対する何とも言えない苛立ちと、早く部屋に入りたいのに入れない苛立ちが重なって、フヨに八つ当たりしていた。

「かよちゃんの言い方が悪いんだよ」

「ちゃんと言ってるよ！」

「初めは元気なさすぎて判別できなくて、二回目は違う言葉混じってたでしょ」

なに、この機械？高性能なのか、そうでないのか、一体どっちなの？こんな時に、明るく元気に『自由を我らに！』なんて言えるわけない。

もちろんフヨにも言わせようとしたけど、どうやらマネージャーの声は対象外らしく、あっさり却下された。

発声が悪いとか、発音が悪いとか、切るところが違うとか、挙げ句の果てには、感情がこもっていないという理由でことごとく却下され、12回も言ったのにドアは閉じられたままだった。合い言葉が合い言葉だけに、何度も連発すると自分が馬鹿らしくなってきた。回数を重ねる毎に元気がなくなっていく。先に合い言葉を変えた方がいい。こんな言葉真面目に言えない。言えと言う程やる気がなくなる。と、考えていたちょうどその時、救世主が現れた。

「自由を我らに！」

あたしとフヨの後ろから聞こえたその声は、まさに完璧だった。これなら声優さんになれるかもしれない。

ピンポン！

機械はすんなりとその声を受け入れ、部屋の扉を開けてくれた。「どうぞ。ちよつとコツがいるんだよ、これ」

振り返ると、そこには小学生くらいの少年がいた。鈍いあたしで

も、一目で彼が死神だと分かる。だって、フヨと同じ種類の生物（？）が、少年の周りをグルグル飛んでいたから。

フヨはというと、驚きと脅えが入り混じったような目で彼らを見て、『なんで…』と小さくつぶやいたようだった。

「かよさんだね？話は聞いてるよ。立ち話もなんだから、中で話そうか」

そう言って、少年は自分のパートナーを引き連れて、部屋に入っていた。

なんて大人びた子供だろう。あたしより全然大人っぽい。

ぼーっと見送っていると、機械から発せられた恐ろしい声が聞こえた。

ビービー！閉じます、閉じます。

「やめてー！」

あたしは慌てて少年を追いかけた。

中に入るとすでに、少年はオンボロ椅子に腰掛けて、あたしが入ってくるのを待っていた。あたしは、ちょうど向かいにあるオンボロベッドに腰を下ろした。ベッドから『痛い、やめてくれ！』と喚くような音がして、たくさんの埃が舞った。

椅子に腰掛けた少年を改めて見てみると、とても不思議な格好をしていることが分かった。膝丈の着物を着ていて、短い髪を（これはチョンマゲと言うのだろうか？）頭のでっぺんで一つに結っていた。見た感じ、小学校の高学年くらいだろう。顔に関してはいたって普通で、クラスに一人はいる秀才風の雰囲気を出してはいるが、子供らしいクリクリとした目には、まだあどけなさが残っていた。実際この目で見たことはないが、イメージで見る座敷わらしそのものだ。

少年のちょうど右肩付近で、フヨと同じ形のものがふよふよ浮かんでいる。色はまっしろ、人魂型、頬はピンク色と、ここまでは完全にフヨと一緒になのだが、大きさはフヨの半分程度しかなく、ちび

る子ちゃんが時折見せる、横長の平べったい目と、フヨより大きい口がついていた。さらに一番目をひいたのは、顔の大半を占める大きな口のすぐ上に、ちょびひげを生やしていることだった。「自己紹介が遅れたね。僕は死神の伝蔵、そしてこっちが田吾作」  
「ぶっ！」

あたしは思わず吹き出してしまった。何その名前！ありえない！！失敬だな、君は。悪いけど、僕は江戸時代からずっと死神をやっているんだ。君より二百歳くらい年上なんだからね」

「それでゲス！年上は敬うべきでゲス！」

伝蔵はいいとして、田吾作は喋り方もありえなかった。フヨとは違って、どちらかというとスネ　くんの声に似ている。

フヨは慣れているのか、田吾作の肩を揉み始めた。本当にその位置が肩なのか不明だけど。「記憶がないそうだね」

びくっ！

「ぎゃあっ、でゲス！」

伝蔵の言葉に、フヨは誰でも分かるくらい大きなアクションをとった。最初の“びくっ！”はフヨのもので、まん丸い体を縦にびよーんと伸ばし、体全体で動揺を現した。そのおかげで、肩を揉む手にかかる力が加わったのだらう。説明はいらないと思うが、『ぎゃあっ』と叫んだのは田吾作だった。こんな時にも“ゲス”をつけるとは…。馬鹿らしさを通り越して尊敬に値する。

「今日は何か困っていることがないかと思って来たんだ。そしたら案の定、部屋に入るのに苦戦してたから、ちょうどよかったよ。危ないところだったからね」

フヨと田吾作の反応を完全に無視して伝蔵が言った。

「え？どういことですか？」

フヨが田吾作に平謝りしているのを横目に、あたしは敬語で聞いた。実は年上だから、ということもあるが、この少年はそれ以上に博士というか何というか、とにかくとても賢い人なんだと感じたからだ。きつとエライ人なのだった。それは、フヨの異常なまで

の動揺から見てとったものなのかもしれない。

「これは制作者の僕しか知らないことだけど、あの機械はね、13回言い言葉を失敗すると、二度と入れなくなるように設定してあるんだ。13日の金曜日にちなんですね。遊び心でつけた機能だったのに、まさか本当にひっかかりそうな死神が出るとは思わなかったよ。これからは君みたいな死神がいるということを踏まえて設計することにする。悪かったね」

…このガキは遠回しにあたしのことを馬鹿にしているのだろうか？それにしても、やっぱりあたしのカンは当たっていたのだ。この伝蔵はきつと、死神の中でも“お偉いさん”に違いない。死神の世界のことはよく分らないが、死神になるために試験を受けなければいけないという程だから、死神の昇級試験や、死神レベルなんてものがあっても不思議じゃない。

そうになると、あたしが一番低いレベルなのは間違いないだろう。記憶はないが、あたしがそんなに優秀なはずがない。勉強ができないという記憶はしっかりと残っているし。

記憶：？じゃああたしは一体どんな記憶を失ってしまったのだろうか？

まずは、そう、あの声の主だ。

『かよはいつもずれてるよな』

度々頭に響く、この声の主がどうしても思い出せない。親とか友達の声はすぐ顔と結びつくのに、この声の主だけはどうしても無理だった。思い出そうとすると、記憶に霧がかかったようになり、ちゃんと顔が見えないのだ。だから完全に失ったわけじゃなくて、どちらかというと薄れている感じに近い。

そして完全に抜け落ちているのは、死んだ時と死んだ後の記憶だ。さつき走ってる時にも考えたが、勉強もできないし、虫も殺せないあたしが、死神なんて職を選んで、それを続けていたなんてどう考えてもおかしい。その理由が、抜け落ちた記憶の中にあるのは間違いないだろう。

そこまで考えた時、あたしは根本的な疑問に気がついた。

あたしはどうして記憶を失ってしまったのか

心理学的なことはよく分からない。だけど、何かきっかけがないと記憶喪失にならないのではないか？

それとも単にあたしがずれているだけなのだろうか？

あたしがまたまたよい方向へ思考を飛ばしていると、伝蔵は立ち上がり、本棚から“死神の基本&応用知識”を取り出してきた。  
「これ読んだ？」

ページをパラパラめくりながら伝蔵が尋ねた。あたしはまるで授業中居眠りをしていて、急に先生に当てられた時のように焦り、バツの悪そうな笑顔を浮かべて『いえ、あの、読んでないです』と正直に言った。

また馬鹿にされるだろうと覚悟していたが、伝蔵は『ふーん』と一言言っただけだった。あたしを見ようとせず、ずっとパラパラやっている。

「あの、一つ聞きたいことがあるんですけど…」

「ん？なんだい？」

ちよつとシャクだが、お偉いさんの伝蔵に相談してみようと考えた。お偉いさんなんだから、あたしのことを何か知っているかもしれない。

「あたし、どうして記憶喪失になっちゃったんでしょうか？」

「さあね」

まさしく即答だった…。

なんて冷たいガキなんだ？『困ったことがないかと思って来た』  
ということとは、あたしが記憶を失って困っていると思ったんじゃないの？てゆうかむしろ助けようと思って来たんでしょ？もうちよつと親身になって考えてくれてもいいんじゃない？

イライラしていると、伝蔵は急に今までパラパラやっていた“死神の基本&応用知識”をパターンと閉じ、それをあたしに差し出した。



「もう時間がないから一つだけ言っておく。僕は忙しくて君にしよつちゅう構ってあげられない。何か思いついたり、知りたいことがあつたら、必ずこの本を開くんだ。いいね？」

あたしは、分かったような分からないような顔をして本を受け取った。だってどう考えても、あたしの知りたいことがこの本に載ってるはずがない。あたしの記憶がこの本に載っていたら、それこそプライバシーに関わる重大な問題である。

あ、もしかして、開く人の知りたい情報が出てくる魔法の本だったりして…？

期待を抱いていると、伝蔵がすかさず言った。

「言っておくが、開いた人の知りたい情報が何でも出てくるような、そんな都合のいい本ではないよ」

…あたしの顔は、向かい合う人に気持ち伝わる魔法の顔なのかもしれない…。

伝蔵が『田吾作、帰るよ』と呼びかけると、田吾作は『わかったでゲス…』と嫌そうに返事をし、むつくりと起き上がった。ちょっと見ない間に、田吾作は『あー極楽、極楽』とでも言うようにぺつたんこになつてくつろいでいて、フヨは左手で、どこから持つて来たのか大きな葉っぱを使って田吾作に爽やかな風をおくり、右手で田吾作のしつぽを揉んでいた。そんなに体の形を変えられるくせに、さつき肩に力がかかった時、どうしてあんなに痛がつたんだろう？不思議な話だ。

伝蔵の方に視線を戻すと、伝蔵は何かを訴えるような目であたしを見つめた。

「この本には確かに、君の持つすべての疑問に対する答えがある。でもそれは、答えを導くきっかけがあるだけだ。それに辿り着くのも、その先に答えを見つけるのも、すべては君自身の問題なんだよ」  
そしてゆつくりとあの言葉を口にしたのだ。

「君が自分で考えないと、そうじゃないと意味がない」

え…？

なんで知って…？

「ちよつ、ちよつとまっ…！」

やっと言葉が出た時、伝蔵と田吾作はすでに跡形もなく消え去った後だった。

## 一日目〜二日目　くかよの記憶く

「5」

「おい、かよ！」

低くてダルそうな声は、なんだかご立腹のニュアンスを帯びていた。いやいやながら振り向くと、そこに彼が立っていた。そして、恐怖の言葉を口にする。

「今日の予定は勉強会に変更する」

「ええええええ！？」

今日は期末考査の結果発表で、あたしの順位は、320人中315位だった。彼にバレるのだけは避けていたのに、どうしてこんなに早く情報を掴んだのだろう。ユキが物に釣られてしゃべっちゃったのかしら？それとももしかして、盗聴器でも仕掛けてるんじゃないでしょうね！？

ボスッ！

「ぶっ！」

彼の体操着を顔面に受けた。

「また関係ないこと考えてたろ。この妄想族が」

「違うよ！ちゃんと繋がりあること考えてたんだよ！」

「とにかく今日は一日勉強だからな」

ぴしゃりと言う。こんな時の彼には逆らわない方がいい。文句を言えば言うほど、彼は勉強の鬼に変身するんだから。

彼の家は学校から歩いて10分くらい。高校生にしては珍しい一人暮らし。あたしの家はちょっと遠いから、だからいつも彼の家で勉強している。たまーにお母さんが様子を見にやってくるんだけど、お母さんはとても優しい人で、『あんだ鬼よ。そんなんじゃ覚えるものも覚えられないわよねえ、佳代ちゃん？』といつも庇ってくれる。将来お嫁に来たら、きっと仲良くやっていけるんだろーな、と想像して、一人で勝手に赤くなった。そんなことばかり考えている

から、妄想族と言われるのだろう。

彼の家に着いて、お母さんに挨拶をし、彼の部屋に入った。彼の部屋はいつも、ギターやら雑誌やら参考書やらでごった返している。今日ももちろん例外じゃなかった。あたしの部屋の方がよっぽどきれいなのに、どうして彼の方が勉強できるのかな、いつも思う。

彼は頭がいい。部活もしてバイトもしてるのに、どうしてそんなに頭がいいのか、さっぱり理解できない。

「そこに座りなさい」

勉強机を指差して彼が言った。ばつちり先生モードである。おとなしく机に向かつて、テスト問題と答案を出した。テスト後の勉強会は、いつもテストの見直しから始まるのだ。

「じゃあテスト問題をもう一度解きなさい。一番悪かった日本史から始めるように」

またまたおとなしく問題にとりかかる。・・・ふう、わからない。考えたけど、どうしてもわからない。テストを受けたのはもう三日も前のことだ。このあたしが覚えているはずがない。

回答を見ながらやっていこうと思い、カバンから先生にもらった回答用紙を出そうとすると、彼があたしの手を静止した。

「一回ちゃんと考えてから答えを見るように」

そして、もう耳にタコになってるあの言葉を吐いた。

「かよが自分で考えないと、そうじゃないと意味がない」

「…よちゃん…!」  
ん？

「かよちゃんってば!」

「うー…?…ぎゃあっ!」

目を開けてみると、いきなりフヨのドアップだった。あたしは驚いて、ベッドから勢いよく落ちた。

「…ったあ…」

フヨが心配そうに覗き込み、『そんなに驚くなんて…、まさかま

た記憶喪失になっちゃった？』と聞いた。

記憶…？そうだ…！

朝になって、フヨがマネージャー会議に行つてくると言つて出て行き、その間あたしは“あの言葉”について考えていたのだ。伝蔵が言つたあの言葉を…。

「自分で考えないと、そうじゃないと意味がない」

あたしはこの言葉を知っていた。

夢を見た。

そして、夢の中の彼が言った。あの低くてダルそうな声で。

「自分で考えないと、そうじゃないと意味がない」

あれは一体誰…？

伝蔵…？

夢の中でも、顔にはやつぱり霧がかかっていて、よく見えなかった。

「ねえ、伝蔵ってどういう子供なの？」

「よかった！記憶喪失になつてないんだね？記憶失くされたら、また最初から全部やり直しだから本当によかった」

と、フヨは泣きながら喜んだ。

「物覚えが悪くて悪かったわね」

あたしはフヨを思いっきり睨みつけた。

「…そういう意味じゃないよ？へへ」

フヨが焦つて訂正し、『伝蔵くんはね、今年で死神暦180年のベテランで、毎年成績一位のとても優秀な死神なんだ。180年も死神やつてる人ってすごく珍しいんだよ。みんなある程度したら転生しちゃうからさ』と教えてくれた。

「へえ。死神になつても転生できるんだね」

あたしは、伝蔵とあまり関係のない、素朴な疑問を口にした。

「そりゃそうだよ。同じ魂なんだからね。死神の職業につく人って、

死神の仕事に憧れてなる人もいるけど、この世に未練があつて、もう少し見ておきたいっていう人がほとんどなんだ。例えば、家族のことを見守りたい、好きな人が死ぬまで待ちたい、とかね。だからその目的が達成されたらほとんどの人はみんな転生しちゃうよ」

「え？じゃあ地縛霊とかつてあるでしょ？あれはどういうことなの？この世に未練があるんじゃないの？」

「一つは、昨日も言ったけど、死神試験っていうのは本当に難関なんだ。だから毎年落ちる人がたくさんいるんだよ。その試験に落ちて、それでもこの世に留まりたいっていう霊が、人間の言うそういう霊に分類されるんだ。試験科目には、人間に見えるように霊気を高める、物を動かす、っていう実技もあるんだけど、その勉強をした霊はその能力も備わってるでしょ？だから人間界に影響を与えちゃうんだよね」

悲しそうな顔をしていたフヨが、一転して今度は憤慨しながら言つた。

「もう一つの理由はね、成績を上げようとする死神のせいさ！」

「え？どういうこと？」

「死神の成績は数字で表されるんだけど、生命力が強い人間ほど、殺した時の数値は高くなるんだ。つまり、生命力が強い魂ほど、殺すのが難しいってことね。だから、伝蔵くんのように能力の高いエリート達は、生命力の強いターゲットを数人狙えばいいんだけど、普通の死神は、そんなに強いターゲットは殺せないでしょ？だから数を増やそうとするんだ。それで、殺すことばかりにこだわって、アフターフォローがちゃんとできてない死神がいるんだよ。ちゃんと霊界へ連れて行ってあげないから、霊はどこへ行けばいいのかわからなくて、その場所に留まることになってしまう。ひどい話さ」

「自分も人間だったくせにねー」

「そう思うでしょ！？」

フヨはプンプン！と自分の口で効果音を出していた。

「うーん。それじゃあ伝蔵は、まだ何かやり残したことがあるのか

な？」

と、あたしは伝蔵へ話を戻した。あたしの問いかけに対して、『どうだろうね。幼馴染がどうのっていう話は噂で聞いたことあるけど、もう180年も前のことだからね。きつと死神の職業が好きなんじゃない？』と、フヨが適当に返す。まだ腹の虫がおさまらないのだろう。今度はプリプリへ効果音を変えていた。なかなかおちやめである。

結局、響くんの学校が終わる時間まで、ずっとぼーっとしていた。部屋の中には、骨董品に分類されるような古い古い時計があつて、どうして死んでるのに時間が必要なのかと聞いたら、人間の時間を把握しないと仕事やりにくいから、ということだった。伝蔵に本を読めと言われていたけど、どうしてもそんな気分になれない。フヨの話によると、殺すためには念というものをターゲットに送らなければいけないらしく、『触れたらそこで終り』というわけにはいかないらしい。また殺すために響くんのところへ行かなければならないと思うと、気が重くて、本を読むような気分にはどうしてもなれなかったのだ。

ゴーン、ゴーン、ゴーン　重々しい音で、時計が3時を告げた。フヨは『おっと、そろそろ響くんの学校が終わる時間だ。さあ、行こっか』と、まるでピクニックにでも行くかのように元気よく言った。あたしはフヨに急かされながら、重い足取りで部屋を出て行った。

「6」

昨日と同じ風景。学生達が楽しそうに通り過ぎていく。老校舎は今日も同じようにそこにあって、太陽が優しい光で包んでいる。あたしは昨日と同じように、花壇に腰掛けた。腰掛けてるように見えるだけで、結局は浮いているんだから、しんどくない空気イスと

いうことになる。昨日のように楽しむという気にはなれず、ぼーっと学生達が通り過ぎるのを見送った。

「念はね、想像力が必要なんだ。いろんなバージョンの死に方を想像するんだよ。あ、でもそれって、かよちゃんの得意分野だよね。だって妄想族だもんね」

フヨが横で“念の送り方”をしきりに説明していたけど、あたしは右から左へと、話を流していた。こういうことは得意中の得意だ。“妄想”と“話を流す技”は、授業中“居眠りせず授業を聞かない”ために、よく使った手段だった。あたしは、念を送るつもりなんてさらさらなかった。死神だから仕方ないのかもしれないけど、これ以上人の死を願うのが、どうしても嫌だったのだ。

15分ほど経ったころだろうか？校舎から、昨日と同じように、他の学生とはどこか違う雰囲気を持った男の子が出てきた。響くんだ。

あたしを見つけると、信じられないことに、うれしそうな顔をしてお手を振り、走って近づいてきた。

なんでよ！？あたし殺しに来たんだよ！？

あたしは逃げようとした。だけど、フヨにがっしり足を掴まれて逃げられない。

「あんた若い女の子の足にへばりつくなんて変態かー！！」

「ちよちよちよちよつと！！！！意味わかんないこと言って貶めようとしなideよ！何考えてるのさ！何逃げようとしているのさ！昨日と同じことしてないで、早く念送ってよ！！」

フヨは、あたしのなすりつけに多少同様したようだったが、あたしの根拠のない発言に免疫ができてきたのか、足を離してはくれなかった。

「ていうか何で響くんはあたし達のこと見えてるのよ！そんな人に念を送るなんて、そもそも間違いなんじゃないの!?」 「そんなの僕だってわかんないよ！だけど、別に見えてたって、念は念じるだけなんだからどっちでもいいんだよ！」



そこまで言つて、フヨはあることに気がついたようだった。『……かよちゃん？ボクの話全然聞いてなかったでしょー！』　げっ！　バレた……！　フヨはますます強い力であたしの足を掴んだ。あたしとフヨは一步も譲らない攻防戦を繰り返した。しかし、この勝負は結構前からあたしの負けが決定していたようだ。

『……ぷっ』と、あたし達のすぐ後ろから笑い声が聞こえた。

声がした方を振り返ると、そこにはすでに、響くんが立っていた。フヨも必死だったので、響くんが居ることに気づいていなかったのだろう。響くんを見て、ほっと一息ついたかと思うと、すぐにわざわざ口で『にやり』と言つて、勝ち誇つたような表情を見せた。

むかつ！あたしはフヨのほつぺたを、思いっきりつねり上げた。

「俺昔から靈感が強いんだ」

死神にとりつかれた人間“響”、フヨ、そしてあたしの三人は、学校近くの公園で話をすることになった。死神にとりつかれた人間が、当の死神と話をするなんて、前代未聞じゃないだろうか？だって、死神の普通はどうだか知らないけど、幽霊が見えたり幽霊に触れられる人間は、絶対普通じゃない。

この公園は学校の裏に位置し、野球ができるくらい大きな運動広場、そしてその周りには、緑いっぱいのマラソンコースが設けられ、遊具は公園の隅に全体の10分の1しかないという、運動重視の公園だった。学校の裏だということもあるが、公園を挟む形で総合病院も建つていたので、昼間は学生や入院患者など、たくさんの人が訪れる憩いの場になっていた。あたしたちはマラソンコースにあるめったに人がこない、入り口から一番遠いベンチに腰を下ろした。

「響くん、あなた知らなかったとはいえ、とんでもないことをしかしてしまったのよ。あたしは死神なの。あたしと握手なんてしたから、響くんは三日後に死ぬことになっちゃったんだから。……あ、言っちゃった……」

いくらなんでも、『あなた三日後に死にます』と言われて、シヨ

ツクを受けない人間なんていない。あたしってほんとにバカだ…。

ところが響くんは、動揺したようには見えなかった。それどころか、信じられない言葉を吐いた。

「知ってるよ」

「へ？」

「あんたが死神だということも、死神に触れたら三日後に死ぬってことも」

……。さすが靈感が強いだけある。それじゃあ握手してきたのつて、もしかして…。

「俺は死にたいんだ」

…やっぱり？

どう言葉をかけたらいいのかわからず、フヨに『助け舟を出してくれ』というメッセージを込めた目線を送ってみた。フヨは、そのメッセージをしっかりと受け取り、

「悪いんだけど、死ぬのはちゃんと三日後にしてよね？スケジュール調整が面倒だからさ」

という、沈みかけ…。いや、もうすでに沈んだ助け舟を出してくれた。

フヨに助けを求めるなんて、あたしって正真正銘のバカだったのね…。

「えっと…、響くんはどうして死にたいと思ってるの？」 沈黙に耐えられず、苦し紛れに出た言葉。

これもバカな質問だっただろうか。死にたい理由なんて聞いてどうなる？理由はどうあれ、彼は死ぬ事が決定したんだ。それもあたしは死神だ。理由や事情なんて関係ない。死にたくても死にたくなくとも、そんな関係ない。ただ、とりついて、殺して、そして魂を連れて行くだけ。あたしに理由を話したところで何も変わらない。響くんは、あたしの問いかけには答えず、立ち上がって空を仰いだ。もうすでに日が暮れていて、夜空だった。たくさんの星が、所

狭しとひしめきあっている。

「変わった死神だな」

そうぼつりと言つて、あたしの方を振り返つた響くんの表情には、悲しみ・苦悩・せつなさといった、様々な負の感情が入り混じっていた。

「理由なんて何でもいいだろ？とにかく俺は何度も死のうと思つた。でも、死神が来てくれないと、どうしても死ねなかった。一命を取り留めてしまふ。だから君が来てくれたことには本当に感謝してるよ」

嬉しそうに響くんは言う。

「三日後が楽しみだ」

少し間を置いて、優しい微笑みを浮かべて響くんは言った。  
低い声だったのにもかかわらず、その声は妙に公園に響いた。

## 二日目 くかよの疑問く

### 二日目

「7」

「かよちゃん、いつまでここに居るつもりなのさ。もう帰ろうよ」  
誰もいない公園。当たり前だ、もう夜中なんだから。公園の時計を見ると、午前二時をまわっていた。幽霊達が活発に行動すると言われる丑三つ時である。

あたしは響くんが帰った後もずっとここに居た。何をするわけでもなくずっと…。ただ響くんの言った『三日後が楽しみだ』という言葉だけが、頭の中で繰り返し繰り返しリピートされていた。

「どうしたの？」

フヨが心配してあたしの顔を覗き込んだ。

「かよちゃん！？泣いてるじゃない！どうしたのさ、一体！」

自分でも気がつかなかった。あたしの頬をとめどなく涙が流れていた。『魂だけになっても涙は流れるんだ。でもその水分はどこから来てるんだろう？』と、そんな余計なことを考える余裕があった。だって、あたし自身どうして自分が泣いているのか分からないのだ。  
「かよはいつもずれてるよな」

また、あの低くてダルそうな声が聞こえた。

確かにあたしってずれてるね。自分のことも分からないなんて。

響くんのことは確かにショックだった。死にたいと思うなんて悲しすぎる。だけど、死神であるあたしがそんな風に思うなんて変だ。あたしのせいで“死”が確定してしまったのに、どうしてそんな風に思えるというのか。

わけがわからないまま、あたしはフヨに『帰ろうか』と言って、やっと公園を後にした。

「お前が自分で考えないと、そうじゃないと意味がないんだ」

またあの声が聞こえた。振り返って公園を見渡したけど、誰もいなかった。

「8」

「あのさ…、あたし女優の才能ないよ」

「見ればわかるよ」

「ちよつと、それどういう意味よ！顔ってこと！？殴るよ？」

「いったあ！もう殴ってるじゃないか！そのすぐ殴る癖なんとかしてよ！」

フヨは、あたしにひっぱたかれた左ほつぺたを、両手でおさえようとしながら言った。（でも右手が届かないからおさえきれない）

昨日に続いて部屋の前で足止めを食うわたしたち。昨日みたいに伝蔵が来てくれたらいいんだけど、12回失敗したあたしは遠い目をしながら思った。

と、その時だった。特殊な力があるのかもしれないと思う程グツドタイミングで伝蔵が現れた。

「あきれて物も言えないよ」

第一声から相変わらずひどい言い様である。あたしはちよつとムカつとしたが、ドアを開けてもらうために我慢して、愛想よく振舞うことにした。

「すみません、こんな時間に…。睡眠時間を割いてまで来ていただいてうれしいです…っつ」

最後に舌を噛んでしまったが、こんなに下手にでているんだから、伝蔵はドアを開けてくれることだろう。一つや二つイヤミを言われるかもしれないが、それくらいなら我慢できる。

「君、そんな丁寧な言葉喋れるんだね」

おさえて、おさえて…。

「でも、恐ろしく似合わない」

我慢、我慢…！

「でも逆に馬鹿を露呈してしまったわけだけどね」

………は？

「はあ……、君やつぱり本読んでなかったんだね。魂に睡眠なんて必要ないんだよ。眠たくなることがないんだ」

え……？ そうなの？ でもあたし眠たくなっただけ……。

「その分だと、どうやら君は眠たくなっただけど、まあ君は例外だったってことさ。分からないことは本を調べるようにと言っておいただろう？」

『えへへ』と、あたしは愛想笑いでごまかしをはかった。

「……じゃあこうしよう。今日一晩中勉強するならこのドアを開けてやってもいい」

これは完全に伝蔵の誤算だった。承諾するのを前提とした条件を出したつもりだったのだろう。伝蔵にとって勉強はそんなに苦ではないのだ。でもあたしにとって、部屋に入れないのと徹夜勉強とは、はるかに徹夜勉強の方がイヤだった。あたしは最後に13回目の合言葉を言つて、無理ならもう入れなくてもいいやと思った。

大きく息を吸い込み、全身全霊をかけて合言葉を言おうとした、その時だった。

「じ……もがつ！」

「自由を我らに……！」

ピンポン！

「……君は一体何を考えているんだ？」

抱きかかえるようにしてあたしの口を押さえながら、伝蔵があきれたような表情を見せた。今までも何度かあきらめたけど、こんなに感情的な表情を見たことがなかった。伝蔵はいつも状況に合わせて表情を意図的に作っているだけで、あきらめるならあきらめという一つの感情しかなく、その中に様々な感情が見えることがなかった。そう、ロボットみたいだったのだ。だけど、今はとても人間らしい複雑な感情が表情に表れていた。あきらめてはいるけど、焦りや驚き、安堵感などが合わさった複合的な表情だったのだ。

「かよちゃんは何にも考えてないよ」

「どうせ馬鹿なだけでゲス」

マナージャーたちの声にはっとして、伝蔵はあたしから手を離れた。顔を背ける伝蔵の横顔には、少し赤みが差していた。

「…勉強するように」

それだけ言つと、伝蔵は部屋に入ることもなく、そのまま消えてしまった。

「で、伝蔵くん…？でゲス！」

置いていかれた田吾作は、文法的に無理のある言葉を吐いてから、追いかけるように慌てて消えた。

残されたフヨが、あたしに怯えていたようだけど、あたしはさつきフヨが言つた言葉なんてまったく聞こえていなかった。ただ、伝蔵の人間らしい表情がとても印象的で、そのことで頭がいっぱいだつたのだ。

部屋に入ると、時計の針は午前四時を指していた。

「しまったなあ…」

あたしはベッドに横になって、後悔の念に苛まれていた。伝蔵には聞きたいことがあつたのに、どうしてそれを優先して聞いておかなかったのか。伝蔵の表情が印象的すぎたのもあるし、その後にくぐ消えてしまったので、聞くことができなかったのだ。

「ねえ、フヨ」

フヨは机の上に乗って、手帳に何やら書き込みをしていた。きつと仕事関係のことだろう。もうすぐ朝のマナージャー会議が始まる時間ということもあり、とても忙しそうだった。ワンテンポ遅れてフヨは「なーに？」と、手帳に目を向けながら答えた。

「フヨも伝蔵も消えて移動できるでしょ？あたしも死神なんだからできるんじゃないの？」

「んー？それはちよつと無理なんだよね。かよちゃんはそこまで力つけてないからさ」

意識は仕事に集中しているのだろう。あたしの方を見ずにそれだけ言った。

もしできるなら、今から伝蔵のところへ行きたいところだけど、あたしに力がないなら仕方ないな、とあきらめた。別にこれから先伝蔵と会えなくなるわけじゃない。死神同士なんだから、またすぐ会うことになるだろう。

次に会った時、絶対聞かなくてはいけない。

「自分で考えないと、そうじゃないと意味がない」

どうして伝蔵がこの言葉を知っているのかということ。

「あふ……」

また眠たくなってきた。やっぱりあたしって特殊なのかな……？

意識が薄れていく中、伝蔵の表情が浮かび、そして笑顔になった。初めて見る笑顔だったけど、あたしの妄想の技術が秀でているからなのか、とてもリアルで、とても優しいものだった。そしてその優しい笑顔がゆっくりと違う人の顔に変化した。あれは……、響くん？

そして、『三日後が楽しみだ』という言葉が聞こえた後、すべての光が消え、一瞬にして真っ暗になった。

あたしはそのまま、眠りの世界へ落ちていった。



## 二日目 くやるべきこと

「9」

「…何見てるんだ？」

「……………アリ」

「…何で見てるんだ？」

「……………すごいから」

「…何が？」

「だってね、アリは自分の体の何倍も大きいものを運ぶんだよ」

「…で？」

「人間はどう？無理でしょ」

「そうだけど…。もっと他のもの見ないか？ていうか見るべきだと思う。せつかく動物園来てんだから」

「でもね、例えばアリが人間と同じ大きさになったとしたら、人間よりも遥かに強いと思うの」

「…うん、だけど…」

「繁殖能力も高いから人間なんてすぐ滅びると思うの」

「…そうだけどさ、今は…」

「アリが小さくてほんとによかったよね！んじゃあ次キリンさんいこっか！」

「いや、次も何もアリは…」

「なあに？」

「…はあ。ほんとにかよっていつでもずれてるよな」

彼はあきれた表情を浮かべる。

でもあたしは知ってる。

ほんとは全然あきれてないの。

だって、とっても優しい声なんだから。

「…ん、ゴーン

「…あー…？」

ゴーン、ゴーン、ゴーン、ゴーン、ゴーン、ゴーン、ゴーン、ゴーン

「うるさあい！」

激しい且つしつこい時計の音で目が覚めた。

…げっ！もう12時！？

時計の針を見て焦った。寝なくてもいいはずなのに、すっかり7時間程睡眠をとってしまったのだ。

フヨは、マネージャー会議が長引いているのか、まだ帰ってきておらず、机の上には『2時くらいに帰る』と書かれたメモが置いてあった。

「フヨが帰って来るまで勉強しようかな…」

条件を飲んだわけじゃなかったけど、部屋に入れたというのに、何も勉強せず寝てしまったことに負い目を感じ、伝蔵に申し訳ないような気がしてきた。

今までのように冷たい伝蔵だったら、そんな風に思わなかったかもしれない。だけど、あの人間らしい表情を見て、伝蔵が本当にあたしのために言ってくれているような気がしたのだ。

あたしはベッドから起き上がり、机に向かって“死神の基本&応用知識”とにらめっこした。『この本には確かに、君の持つすべての疑問に対する答えがある。でもそれは、答えを導くきっかけがあるだけだ。それに辿り着くのも、その先に答えを見つけるのも、すべては君自身の問題なんだ』と、伝蔵は言っていた。一体どういうことなんだろう？とりあえず、何かの暗号なのかと思ったあたしは、文字を組み合わせたリ、アルファベットに直してみたりした。

……だめだ。

結果、やっぱり普通の日本語だということが分かった。

『すべての疑問に対する答え』っていうことは、あたしの記憶のことも、あの声のことも全部ってことよね？

諦めて、一つずつ言葉を理解しようと試みた。

でも、それは『きっかけ』なんだから、そのまま答えが載ってい

るわけではないのね？

だんだん頭が痛くなってきた。

それで、ええと…、『きっかけに辿り着くのも、疑問の答えを見つけるのも、あたしの問題だ』と、そういうことよね、たぶん…。

そして自信も無くなってきた。

っていうか子供のくせに何で暗号みたいな言葉使うの？もつと簡単に言つてよ！本当に賢い人っていうのは、相手に合わせて言葉を選ぶ人のことを言うんだから！

慣れない国語の勉強（？）をさせられてイライラが募り、一通り逆ギレ文句を言ってから、落ち着いたところでひとまず何か調べてみる事にした。

疑問かあ…。あ、そういえば、昨日公園で涙が出た時、何で死んでるのに涙が出るのかなって不思議だったんだ。それ調べてみよう。本の最後にある索引から『な』を探す。

あ、あつたあつた！34ページつと。

34ページの表題は、『生きてる時と同じ感情表現』となっていた。

なになに…。

“死神に関わらず、すべての魂は、悲しみや喜びで涙を流したり、焦りで汗を出すことはありません。しかし生前の記憶から、状況に合った感情表現の方法を、知らず知らずのうちに選び出し、それを知らず知らずのうちに自分の力でホログラム化することがあります。

”

へえ…。じゃああの涙は自分で表現してたってことか。

“同じように、眠たくなったりお腹が空いたりするのも、記憶から出てくる状態であつて、実際に魂がそのような状態になることはありません。”

ああ、昨日伝蔵が言ってたのってこのことなんだ。そういえば、眠たくなる時ついても考え事してるもんね！頭使うの嫌いだっただから、昔っからすぐ眠たくなってたもん。……って！何納得してん

の、あたし！？寝る必要のないのに寝るとか馬鹿じゃん！だから伝蔵が馬鹿を露呈したとか何とか言ってたんだ！やっぱあいつむかつく……！

一人ノリ突っこみをしてから、一人でむかついて、そしてもつと他に疑問はないか考えた。うーん、他に何かあったっけ？

あたしは死神として生活した日々のことを思い出した。（記憶があるのは二日だけだけど……）改めて思い出すと、フヨはとても大変だと思う。記憶を失くしたパートナーに死神の基礎から教えるのだ。さらに、勉強が嫌いだというあたしの我儘に振り回されて、その都度口で説明している。

……。あ。

そつえば、昨日フヨがなんか言ってたような……？なんか運命の輪がどうか……。そう、あれはフヨの小さな独り言だった。

『中には、その運命の輪を乱すやっかいな死神もいるんだけどね……』  
『やっかいな死神？アフターフォーをしない死神の他に、どんなやっかいな死神がいるんだろう……？運命の輪なんていう壮大なものを乱すのだから、相当なやっかいものだ。』

えーと、えーと……。

あたしは索引で『運命』を引き、858ページを開いた。

全部で1000ページもあるこの本のうち、140ページ程は索引だったので、858ページはこの本の最後の項目だった。表題は『死神が決してやつてはいけないこと』となっている。内容は大きく二つに分類されていた。

“ 1、殺した霊は必ず最後まで責任もって引率すること。”

これには、昨日フヨが説明してくれた内容と同じことが書かれていた。途中でほったらかしにすると、じばく霊になり、死神が霊をほったらかしにしてしまう原因の第一位が、成績をあげたいがためとなっていて、たくさんの人を殺して成績をあげようとする死神は、本物の死神ではないと批判している。

責任意識のない死神が増えているという現状を危惧して、もともと殺した時点で成績に加算していたところを、ちゃんと死者の国へ送り終えるまでに変更しようという動きがあるらしい。“最後まで見届けよう人間の最後を！”というキャッチフレーズも記載されていた。

多少キャッチフレーズが気にかかったが、今はそんなことどうでもいいので、とりあえずスルーした。

そして、次の項目が目に入った時、あたしは両目裸眼2・0を疑った。

“2、生き延びないように最後まで職務を遂行すること。”

…え…？

…生き延びる…？

でも…、そうか…そうだね。運命の輪を乱すつてことは、つまりそういうことなんだ。(今気づいたけど、)確かにそれしか方法がない。でも確かフヨは、そんなことができないように、ちゃんと最終確認があると言っていた。ということは、最終確認で引っこからないような、そんな方法があるつていうこと…？

「かよちゃん、そろそろ行こっか」

いよいよ“2”の内容に入ろうとした時、突然フヨの声がした。

『え…！？』振り返ると、ベッドの上にフヨが居て、ニコニコしながらあたしを見ている。

「いつ帰ってきたの!？」

「うーん、一時間くらい前なんだけど、せっかく勉強してるのにもつたいたいと思つてずっと見てたんだ」

「なんかもつたいたいってのが気にかかるけど、まあいいや。でも行くつて、どこに行くの？」

あたしは本を閉じて、ベッドに向かいながら聞いた。フヨは、手に持っているスケジュールと書かれた小さなメモ帳を見ながら、

もうそろそろ響くんの学校が終わる時間なんだ。念を込めに行こなくちゃね』と、昨日に続いて、またピクニックにでも行くかのようになんて言った。

「え！？もうそんな時間なの！？」

慌てて本棚の横の時計を見ると、フヨが嘘を言っていないことがわかった。時計の針はもうすぐ三時を指そうとしていたのだ。自主的に勉強したことがないあたしが、三時間も勉強していたなんて…と自分に驚いた。

そしてフヨが、あたしの心を読んでいるかのように言った。 「奇跡だよな」

ゴーン、ゴーン、ゴーン、ゴーン！

今は三時。一回余分に鳴った時計の音が何だったのかは、ご想像にお任せしようと思う。

「10」

今日もいつもと同じ風景だった。校舎も太陽も、学生たちも何も変わっていない。まるで同じ日を繰り返しているようだった。人々は毎日大きな変化を求めているわけじゃない。記憶に残るのは大きな出来事なのかもしれない。だけど、将来大人になって、こんな風に平和な日々が積み重ねられた結果、高校の時は楽しかったとか、あの頃はよかったとか、思い出すことになる。だから何も無い平凡な毎日でも、きつと自分の中に何かを残して、きつと自分の成長に役立っているはずなのだ。彼らの平和で楽しそうな表情を見ると、あたしは自分が死んでいるということが急に悲しくなった。あたしもいつもと同じように花壇に腰掛けていたけど、あたしだけは同じようにしていても、決してその輪の中に入っていないのだ。 『三日後が楽しみだ』

その言葉が頭から離れない。それがとても重い。響くんは生きている。望んで生きられるわけじゃない。生きたくても生きられない人だって、この世の中には存在するのだ。 『死にたい』なんて、そ

の人が聞いたら何て思う？響くんが何で死にたいのかなんて知らないけど、贅沢で傲慢で、考え方がとても子供じみてて、浅はかだと思ふ。死ぬということが一体何を意味するのか分かっていないのだから。

どんな理由があつたにせよ、生きなければいけない。『死にたい』なんて、現実から逃げているただの弱虫ではないか。

そして、その響くんを殺すんだと思うと、あたしはやり切れない気持ちでいっぱいになった。

チラッと、フヨの方を見る。フヨは、学生達の中に響くんがいなか探しているようだった。学校に来る途中で、フヨはまた念の送り方を教えてきた。あたしは、相変わらず右から左へ聞き流していたけど、一つ気になることがあつた。

“念を送る”のも、本にあつた“2、生き延びないように最後まで慎重に職務を遂行すること”の一つなのだろう。

あたしは念の送り方なんて知らない。

あたしの力が未熟で、念を送れなかったら、響くんは生き延びられるのだろうか？

フヨに確認したかったけど、言えば、良からぬ考えをめぐらしているのがバレるのではないかと思つて聞けなかった。

でもやっぱり気になる。聞こうか聞かまいか悩んで、チラチラ見ていると、フヨがその視線に気づいた。そして、『心中察するよ』みたいな顔をし、安心させるように言った。

「響くんみたいな人間は、念なんて送つても送らなくてもあんまり変わらないから、安心していいよ。死にたい人間を殺すのは、かよちゃんみたいに力や知識がなくても簡単なんだ。でも、まあ、一応ね。やることないし、これからのためにも練習がてら、ね」

完璧に勘違いしていたが、運良くあたしの聞きたい情報が手に入った。でも結局念で生き延びさせるのは不可能だと知って、がつくりきたのだけれど。

「かよ！」

ハッとして顔をあげると、いつのまにか、あたしの前に響くんの優しい笑顔あった。

「いよいよ明日だな」

響くんが優しく笑いかけてくる。あたしはその笑顔を避けて、こくつと頷くのが精一杯だった。

どうしてそんなにうれしそうに笑ってられるんだろう。

心が痛む。

何も言わず、顔をそらし続けるあたしを見て心配したのだろう。

あたしの横に腰掛け、どうした？と言うように顔を覗き込んできた。

「なんで泣いてるんだ？」 …え？

またしても、あたしの頬を涙が伝っていた。

なんで？

どうして？

わからない。わからないけど、胸の奥がすごく熱い。

涙が後から後から流れてくる。泣いている理由が分からないんだから、泣きやむ方法もわからなかった。

「…つごめつ…ごめんなさつ…」

その時だった。それは一瞬の出来事で、あたしは何が起こったのかも分からなかった。あたしはぐいっと強い力で引つ張られたかと思うと、響くんの胸の中に抱き寄せられていたのだ。

「…ひびき…くん？」

「……………」

響くんは何も言わなかった。だけど、まるで返事をするかのように、腕にぎゅっと力が入り、あたしは押しつぶされそうなくらい、強く強く抱きしめられた。

どれくらい抱きしめられていただろう？響くんの腕の中から解放された時、あたしの涙は、もうすっかり渴ききった後だった。

「…公園行かないか？」

何もなかったかのようにそう言うと、響くんはあたしの手を取り、



いつものように優しい笑顔を向けた。

その笑顔を見て、あたしの中に強い意志が生まれたのが分かった。

「…ないで…」

「え？」

「死なないで…！」

それだけ言つて、あたしは走り出した。

『かかかかよちゃん！？』という、フヨのまぬけな声を背にして、  
ようやく分かった。あたしは、響くんに死んでほしくないんだ。  
死ぬことが間違つてゐるから、というだけじゃない。なぜだか分  
からないけど、響くんだけには、どうしても生きてほしかった。

さっきまでとはうってかわつて、あたしの心は晴れ晴れとしてい  
た。自分の迷いが消えたとも言うのだろうか。原因は皮肉にも、  
ターゲットである響くんに、抱きしめられたおかげなのだと思う。

今、あたしの目的はただ一つ。

響を助けない。

それだけだった。

## 二日目〜三日目　〜伝蔵の気持ち〜

「11」

相変わらずあたしは、部屋の前でつまずいていた。伝蔵を呼んできてもらおうにも、瞬間移動できるくせに、フヨはまだあたしに追いついてこない。あたしはまた12回も合言葉を失敗していた…。あと一回。やばい。でも、早くしないと手遅れになるかもしれない。タイムリミットは明日に迫っているんだから。

しょうがない。最後にかけてみよう。もし無理だったとしても、きっとフヨがなんとかしてくれるだろう。楽観的に物事を考えるあたしだったが、自分の持つ力をすべて出し切るつもりで口を開いた。「じ…」

「自由を我らに！」

！？

振り向くと、伝蔵があきれたような顔をしてあたしを見ていた。ピンポン！と明るい機械音がして扉が開く。

「さすがだよ」

その声は、機械音とはまったく正反对で、どっしり重々しく廊下に響いた…。

そんな人にショックを与えるようなイヤミ、よく思いつくわね！伝蔵の背中を追いかけながら、心の中で反抗してみた。

あたしの部屋だというのに、伝蔵は当たり前のように椅子に腰掛けて、あたしにも座るように促した。今日は伝蔵だけで、田吾作はいないようだ。伝蔵の表情には、昨日見せた人間らしい感情など一つも残っておらず、今までの何の興味も示さない顔にすっかり戻ってしまっていた。だけど、人間らしい一面があるということが分かっていれば、伝蔵の冷たい態度もそんなに気にならなかった。

伝蔵には、一つ聞いておかなければならないことがある。もちろん昨日聞きそびれた、『君が自分で考えないと、そうじゃないと意

味がない』という言葉のことだった。どうして伝蔵がその言葉を知っているのか。 「一つ聞きたいことがあるんですけど」

「なに？」

相変わらず、何の興味も示さないような顔で冷たく言った。

「昨日、君が自分で考えないと、そうじゃないと意味がないっていったでしょ？あの言葉どうして知ってるんですか？」

敬語なのかそうでないのか曖昧だったが、伝蔵はさして気にしていない様子で、ちよつと考えるような表情を見せた。そして、あたしの目をじつと見つめた。伝蔵の目は、すべてを見透かすように鋭く、思わず目を逸らしたくなった。

これが目力っていうやつ？こわ…。

でも、逸らすわけにはいかない、あたしの負けになってしまう！変な対抗意識が芽生え、あたしは精一杯、自分の目力を出そうとした。まるで睨んでいるかのように、必死に見つめ返す。

どれくらい戦っただろう？目が乾いて痛くなってきた。たぶん本当は、乾いてないし痛くないのだろうけど、あたしの生前の意識がそれを再現している。

こんな時にかぎって…！

死神暦の長い伝蔵は、そんな事態に陥ることはないだろう。ということは、あたしが断然不利な状況ではないか。自分のまぬけさを恨む…。

と、考えたちようどその時、伝蔵はふつと目線を下げた。

やった！あたしの目力が勝利したんだ…！！

と、喜んだのもつかの間、伝蔵はやつと口を開いたかと思うと、『いい目だ。何かあったね？』と、全然関係ないことを言った。

あたしは、『なんで質問返し！？』と考えることもできないほど、ただ焦りまくった。

何かあったねって…。今日あった出来事って、一つしかないじゃん…！

あたしは伝蔵に言うのを躊躇した。伝蔵は、死神のお偉いさんな

んだ。生き返らすなんて言ったら、止められるに決まってる。だって、死神のルールに違反して、運命の輪を乱そうとしているんだから。

無言でいると、伝蔵が立ち上がり、あたしの傍までやって来た。

そして、座ってるあたしの頭を、まるでいい子いい子するように撫でながら言った。

「本読んだんだね」

「え…、あ…、うん」

優しい口調の伝蔵と、見た目が子供の伝蔵に、高校生のあたしが子供扱いされることに戸惑った。でも、不思議と嫌だとは思わなかった。伝蔵がとても暖かく、あたしを包んでくれているように感じた。

「君はそのまま、自分の思う方法で迷わず進んでいけばいい。何があっても、今の気持ちを忘れないようにするんだ」

伝蔵は言葉とは違い、とてもつらそうな表情を見せた。そう、それは昨日と同じ感情がこもった人間の表情だった。

もしかして、あたしは何をしようとしてるのか知ってる…？ でも、なんでそんなに悲しそうな顔をするの？

「じゃあ僕はもう行くよ」

何かを振り切るように、突然くるりとあたしに向けたその後ろ姿は、今までの伝蔵のものとは違っていた。肩が震えているように見えるのは、気のせいだろうか。

「ま、まって！」

伝蔵は振り返り、笑顔を見せた。そして何も言わず、ふっと姿を消した。伝蔵の笑顔を見たのはそれが最初で最後、ううん、後にしと思うと、伝蔵の姿を見たのが、それで最後だったのだ。

### 三日目　　初めての本気勉強

「12」

「っあー!!」

あたしは終に大声をあげてしまった。その声に驚いた彼は、一瞬手元がくるってコースアウトしてしまった。

「卑怯者か、お前は！」

ジュゲムに吊り上げられるワリオ+マシンの下を、あたしのピーチ+マシンが追い抜かした。『へへへ!』と不敵な笑みを浮かべ、『集中力が足りないんだよ』と無理なアドバイスをした。これくらいしてやって当前だ。だってあたしはすでに一周遅れなんだから! …へへへ…。「はい、終わり」

結局、一度も勝てずに夕方の六時になってしまった。

「えー、もうちょっといいじゃん! だって今日バイトないんでしょ?」

「バイトないけど、帰りが危ないから無理!」

彼はとてつもなく過保護だ。遊ぶのはいつも六時まで。これじゃ小学生と同じ時間帯だ。でも、反対しても聞き入れられた試しがないので、諦めてしぶしぶ帰る用意を始めた。

「なあ、かよ」

呼ばれて振り向いたあたしに、彼は真剣な表情で言った。

「この間進路書く紙もらっただろ? 進路によって、三年のクラス分けするやつ。あれ明日提出だけど、お前何て書いた?」

あたしはそれに答えることができなかった。言えば、お叱りを受けること間違いなしだったから。だから『…まだ書いてない』と嘘を言った。

「ふうん…」

彼はそう言うと、鞆から自分の紙を出して、あたしに見せて言った。

「俺はK大受けるよ」

「うん、だろうと思ってた」

「俺は…、K大受けるよ」

「……？うん、頭いいから大丈夫だよ」

「だから…、俺はK大受けるって言ってるんだけど」

「……？」

何が言いたいのか、さっぱりわからなかった。悩んでるあたしを見て、彼はちよつと間を置いてから言った。

「俺はいつも、自分で考えないと意味がないって言うけど、考えてその結果、もし俺と同じ進路だったとしても、俺は怒ったりしないから」

え……？それって……。

「まだ二年の夏なんだから、今から勉強すれば、かよでも大丈夫だよ」

優しい笑顔で彼が言った。

その日の夜、あたしは進路の紙をそのまま鞆につめた。

はっ……！

気がつくと、あたしは机に向かったまま、本を枕にしていた。本にべったりとヨダレがついている…。

しまった…！読んでいる途中に寝てしまったらしい。なんでこんな時に寝てしまうのだろう？眠くならないはずなのに、なぜかすごく眠い。

「フヨ……？」

フヨはまだ帰ってきていないようだ。そんなに長時間寝ていたわけではないらしい。

ほっと胸をなで下ろし、あたしは本のヨダレを拭き取った。

“ 2、生き延びないように最後まで慎重に職務を遂行すること” に

は、こう書かれていた。

(1) 念をおろそかにしてはいけない。毎日必ず念を送りに行くこと。念を送る際は、他の事を考えず、その人間の死をひたすら願うこと。長時間考えると飽きてしまうので、その人間の死ぬ手段や方法を色々想像するとよい。

(2) 生き延びさせるつもりがなくても、あらゆる偶然が重なった場合起こりうる可能性があるため、ここに、それを回避する方法を示しておく。

(このような状況を未然に防ぐため、昨年度より、「死亡希望人材予定表」(ターゲット表)に予測靈感度を明記し、難易度をつけることにした。)

まず、靈感のある人間には気をつけなければならない。

軽度の靈感(触れると身震い、寒気などの軽い症状)を持つ人間は除外してよい。

中度の靈感(たまに見える、気配を感じるなどの症状)を持つ人間には、注意が必要である。疲れていたり、精神的に弱っている時は、念のため、近づかない方がよい。

それ以上の重度の靈感(いつでも見える、話せるなどの症状)を持つ人間には、細心の注意を払わなければならない。以下のことに注意しなければならない。

(また、幽体離脱している魂を扱う場合は、その人間本体に靈感がなくても、魂同士で見えてしまうので、「重度の靈感を持つ人間」と同様に考えてよい。)

「重度の靈感を持つ人間」は、心霊現象の経験が豊富であるため、すでに幽霊や死神に慣れてしまっている可能性が高い。ほとんどの人間が、普通に話しかけてくると予想される。その場合、こちらから返事をせず、無視するのがよい。

しかし、触れなければ殺すことができないので、近づく方法を考えなければならぬ。起きている時は危険なので、眠っている時を狙う方がよい。それも、レム睡眠中は起きる可能性が高いため、ノーレム睡眠を狙うこと。しっかりと時計を見て、ノーレム睡眠に入る時間を計るように。

『触れてしまえば安心』というわけではない。ここからが重要である。その人間が『死にたくない』『もつと生きたい』と思っていれば安心なので、近づいて死神界などの話をし、交流を深めてもよい。しかしその人間が、『死にたい』『もう生きていたくない』と思っていれば、注意が必要である。絶対に話をしてはならない。触れてしまっているなら、離れた所から最後を見届けていけばよい。

しかし、確率は無いに等しいが、何か例外があり、どうしても話をしなければならぬ状況にあるなら、『絶対に生きたいと思わせたい』ではない。死を目前にして、自然にそう思ったのなら心配はない。しかし、ターゲットが死神と関わることによって『生きたい』と思えば、死神にとって最悪の事態を招くことになるだろう。

難しい文章だった。伝蔵の言葉の何倍も難しい。きっとこの文章のせいで眠たくなってしまったのだろう。

本来なら、確実に逃げ出すところだが、あたしは立ち向かわなければいけなかった。響くんを助けるために。

この文章には、『ターゲットを間違えずに殺す方法』が書かれているのだから、反対のことをしていけば、響くんは生きられるはずだ。



結構時間がかかったが、あたしはこの文章を解読し、『ターゲットを生き延びさせる方法』を見つけることに成功した。簡単にまとめると、こういうことだろう。

？靈感があつて死神が見えていること

？最初から『死にたい』と思つていること

？死神自身の手で、ターゲットに『もつと生きたい』と思わせること

重要なのは、この三つだ。三つのうち、すでに？と？はクリアしているので、あと一つ、あたしが響くんに『もつと生きたい』と思わせれば、この条件はすべてクリアでき、響くんは生きることができる。

そして、以前フヨが、一回触れてしまえば、ターゲット表に二度と載ることはないと言つていたことから、あたしが響くんを生き延びさせれば、他の死神が響くんを連れに来るということもなく、『あたしが迎えに来るまでずっと、響くんは生き続ける』ということになる。

「なにしてるの？ そこまで真剣なかよちゃん、初めて見たよ」

突然の声に、あたしは心臓が飛び出しそうなくらい驚いた。いつから居たのか、フヨはベッドの上でボールみたいにコロコロ転がっていた。

「あたし、響くんを助けるよ。どんな理由があつても、死にたいなんておかしいと思うから。だから、死神にとりつかれた人間が、どうすれば死神から逃れられるか調べてたの」

あたしは正直に言つた。『今更隠しても仕方ない』という気持ちもあつたが、それより何より、フヨに隠し事をするのが嫌だったのだ。

フヨは一瞬悲しそうな表情を見せたが、すぐに真面目な顔になった。

「それは違法だよ」と、諭すように言ったフヨは、今まで見た事ない程、真剣だった。

「そんなこと関係ない。響くんを助けるためなら何でもしてあげる。だって響は……、」

響は……？

響が何……？

……わからない。ずっと心にひっかかってる何かがある。でも、どうしても思い出せないの。

「…しょうがないね」

フヨは意外にも、あたしを止めようとはせず、ひよいとベッドから起き上がった。

「ボクはかちゃんのマネージャーだからね。かちゃんの思うようにすればいいんだ。ボクはそれに従うだけさ」

そう言って、あたしの前を通り過ぎ、すーっとドアに向かって行った。

「ど、どこ行くの？」

あたしは見放されたのかと思った。フヨがいたから、記憶のない状態でも、こうやってやってこれたのだ。フヨがいなかったら、あたしは何をすればいいのか、どうしたらいいのか何も分からない。

「見捨てないで！　ずっと一緒に居て……！」

フヨは、あたしの大きな声にびっくりしたのか、びょーんと体を縦に伸ばした。

「何言ってるの？　響くんを生き延びさせる細工をしてこようと思っただけだよ」

振り返ったフヨは、なぜかほつぺた以外も全部真っ赤になっていた。

それを見て、あたしも真っ赤になってしまったのだった。

### 三日目 くかよの挑戦く

「13」

きれいな星空だった。星の一つ一つが、まるであたし達を祝福しているようにきれいに瞬いている。

初めて彼の背中が意外に大きいことを知った。

やっぱり男の子なんだね。

明日になれば、あたし達はいつも通りに戻ってしまう。だって、彼はこういうの一番苦手なんだから。

このままどこまでも道が続いていればいいのに。

腕にギュツと力を入れた。

この奇跡に近い状況を、噛み締めるかのように、強く、強く……。

「…よちゃん…？」

うん…？

「…よちゃん！？」

誰かが呼んでる…？

「かよちゃん！！」

「……フ…ヨ…？」

頭がぼーっとする…。

「かよちゃん、しっかりしてー！！」

「…え、あ…うん………」

眠い…。瞼が重い…。

「響くんを助けるんでしょ！？起きてよ！お願いだからー！！」

そうだ、響を助けなきゃいけない…。起きなきゃ。

起きて。

そして響を…

「ごめん、かよちゃん…！」

「ゴーン!!!!!!!!!!!!!!」

「……っでえ！」

後頭部に激しい痛みが走り、眠気がどこかへふっとんだ。『よかったあ』と安堵しているフヨの手には、どこから持ってきたのかフライパンが握られていた。あたしはそれを目ざとく見つけて、『なにそれ』とフヨを睨んだ。

「……え、いやあ、これはね……」

フヨはフライパンをあたしに見えないように後ろへ隠したが、その黒い物体はしっかりとフヨの体からはみ出していた。

あたしが目を覚ませたのはフライパンのおかげなので、フヨのほつぺたを掴んで、１メートルくらい伸ばす程度で許してあげた。

それにしても……。響くんを助けられるのは、今日一日しかないのに、どうしてこんな時に眠ってしまったのだろう。そんな切羽詰った状況なのに、どうして今でもこんなに眠いのだろう。眠すぎてふらついているのが分かる。

「フヨ……あたし、なんか……すごく眠い……」

それを聞いて、普段よりもっと真っ赤になったたほつぺたをさすりながら、フヨはその原因を教えてくれた。

「神経が図太いんですよ」

フヨのほつぺたが、さらに真っ赤になったことは言うまでもない……。

あたしとフヨは部屋を出て、昨日響くんと一緒に行った公園に向かった。フヨは昨日出て行った後、響くんのところへ行き、学校を休んで公園に来るようにお願いしてきたらしい。響くんは、どうせ明日死ぬんだからと、快く承諾したようだ。

公園に着くまでの間も、あたしは睡魔とずっと戦っていた。睡魔は恐ろしく強くて、ちょっとした気も抜くと、バタツと倒れてその場で寝てしまいそうだ。例えば車がビュンビュン通る道でも、安心し

て寝られるなんて得だなとか、ずっとしようもない考え事をするハメになった。まあ、それはあたしの癖だから、そんなに負担ではなかったんだけど…。

「ところで、かよちゃん？」

「んあ？」

緊張感のない、間の抜けた調子で返事した。あたしだって、こんな時にこんな馬鹿みたいな声出したくなかったんだけど、眠すぎるんだから仕方がない。「……………まあしょうがないからいいんだけどさ、響くんを生きたいって思わせる方法、ちゃんと考えてあるの？」

「えっと、……………考えてないね」

しまった……！忘れてた……！！もしかして、これじゃあ会っても意味がないんじゃない？

あたしは焦った。そのおかげで、さっきよりだいぶ眠気がひいた。

「どうしよう……」

「かよちゃんらしいっちゃあ、らしいんだがのう」

「じーさんかよ！」

……いやいや、そんなつつこみしてる場合じゃない。

どうしよう。死ぬのは間違ってるって伝えるだけじゃ駄目だよな。うーん、何か他に……。

その時、あたしはついに、睡魔との長い戦いに勝利した。ものすごい名案を思いついたのだ。

そうだ！魂よ、魂！！これはいける！

「死にたくて死んだ人に来てもらって、『やっぱり死になくなかったよー』って言うてもらうってのはどう？」

「そんなの無理だよ」

睡魔に勝つほどの名案なのに、フヨはあっさり却下しやがった。

そして、可哀想な人を見る目であたしを見た。

「それに、それってつまり、他の魂の力で『生きたい』って思うってことでしょ？死神のかよちゃん自身の手で思わせないと無理なんじゃないかったっけ？」

確かにその通りだ。死神自身の手で、ターゲットに『生きたい』と思わせなければいけなかった。

でも、そもそも死にたい理由聞いてないのに、方法なんて思いつくのだろうか？

『死ぬのは間違ってる』っていうのが根本的にはあるけど、例えば、“いじめられて死にたい人”と“何か大きな罪を犯して死にたい人”とでは、死にたくないと思わせるのに、多少違いが出ると思う。

結局その方法は、響くんの“死にたい理由”を聞いてから考えることにした。フヨはそれを聞いて、『大丈夫かなあ』と不安な目であたしを見ていた。

学校の前を通り、公園へ向かう。今日の学校の風景は、まだ授業中ということもあって、昨日までとは全然違っていた。校舎には重々しい雰囲気があつて、生徒を守るという使命に燃えているようだった。

グラウンドで体育の授業をしているクラスがあるのだろう。遠くの方で、人の話し声と笛の音が聞こえる。あたしは『おはようございます』と校舎に礼をして、足早にその場を通り過ぎた。

公園について、入り口にある時計を見ると、午前10時をちよつと過ぎていた。響くんが、怪しまれないように登校時刻に家を出ているとすれば、一時間以上待っていることになる。

待ちくたびれて帰ってたらどうしよう……！あたしはさらに足を速め、響くんを探した。

あたしが握手をしたのは、学校が終わって下校時刻だったということから、早く見積もっても、三時半頃だろう。ということは、あと残り五時間。この間に響くんに『生きたい』と思わせなければ、響くんは死んでしまう。早くしなければ、手遅れになるかも知れない。

野球ができるくらい広い運動公園なので、手当たり次第に探すといっても、かなり時間がかかってしまう。あたしは一番可能性の高いところから探していくことにした。まず向かったのは、この間話をしたベンチだった。だけど、そのベンチにも、他のベンチにも響くんは居なかった。運動場の周りにあるベンチにも、響くんの姿はなかった。

一体どこに……？

不安に駆られたその時、キィ…キィ…という音が聞こえた。音の方へ行ってみると、ブランコに誰かが座っているのが見えた。近づくにつれて、それが響くんだということが分かった。

響くんは、ブランコのちょうど正面にある砂場を、じっと見つめていて、砂場では2、3人の子供が、穴を掘ったり山を作ったりして遊んでいる。平日の昼間だということもあって、遊んでいるのはまだ幼稚園に入るか入らないかの小さな子供たちだった。砂場の横にあるベンチには、子供たちの親が座っておしゃべりをしていた。

響くんは、あたしとフヨに気づくと嬉しそうに笑って、手でおいでおいでをした。

誘われるように隣のブランコに座り、フヨはあたしの膝の上に乗った。響くんの満足しているような表情は、あたしをますます傷つけた。フヨに『聞いていいかな？』という目線を送ると、ウインクを返してきたので、あたしは本題に入ることにした。

「あの…、前にも一回聞いてるんだけど、なんで死にたいなんて思うの？」

おずおずといった感じで、響くんに問いかけた。響くんは満足した表情を崩すことなく、『それはもうちょっとしたら話すよ』と言った。

こう言われてしまつては手立てがない。あたしはフヨに目配せをしてから、ひとまず根本的な話である、死ぬのは間違いだという話をすることにした。



「あの、死んだらね、何にもなくなっちゃうんだよ。絶対後悔すると思うし、やっぱり生きてる時が一番だって気づくと思うの」

その言葉に、響くんはちょっと考える表情になり、あたしから目を逸らして、また砂場で遊んでいる子供たちの方に目をやった。あたしは何も言わず、響くんの返事を待った。

「…逆に聞くけど、佳代自身はどうなんだ？死んで後悔してるのか？生きてる時が良かったって、生き返りたいって、そう思う？」

え……。

何の前触れもなく、砂場を見つめたまま響くんが言った。

あたし…？あたしは……

あたしは死んで後悔しているのだろうか？生き返りたいと思っているのだろうか？

……………。

分からなかった。生き返りたいと思わないことはないけど、生き返りたくない気持ちの方が強いように思う。失くした記憶が、生き返るのを頑なに拒んでいる。

でも、あたしのことはいい。

今は響くんのことなんだから。

あたしは『もちろん生き返りたいと思うよ』と嘘をついた。

嘘も方便だという言葉がある。今がその時だと思った。

「…そうか」

響くんは、まっすぐ砂場を見つめたままだった。

そして突然ブランコから降り、優しく微笑んだ。

「死にたい理由話すよ。ちょっと長くなるから…、ベンチに行かないか？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8457c/>

---

死神が天使にかわる時

2010年12月5日04時22分発行